

4. 編集後記

『古代東ユーラシア研究センター年報』第5号をお届けいたします。

平成26年度からスタートした研究プロジェクト「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」も本年度が最終年度となります。3月にはこれまでの研究成果をまとめた最終報告書を提出します。

本年度は、渡来者・渡来者集団の〈流動と土着〉化の歴史的経緯や意義について総合的な検証をおこなうことを目的として研究を進めることとしました。これに基づいて、平成30年7月14日（土）に第1回シンポジウム「古代東ユーラシアの国際関係と人流」を開催し、關尾史郎先生に「内乱と移動の世紀－4～5世紀中国における漢族の移動と中央アジア－」、荒川正晴先生に「ソグド人の交易活動と香木の流通－法隆寺伝来の香木を手がかりとして－」、成正鏞先生に「古代東アジアの文物交流－馬韓と百済を中心に－」というテーマでご講演いただきました。このシンポジウムでは、4～5世紀における漢族の西方への移住の実態、ソグド人による陸上ルートや海上ルートを通じた東西の交易活動、百済と中国王朝・東ユーラシア北方地域・日本列島との交流とその意義などについて歴史学・考古学の視点から検討し、古代東ユーラシア、とくに中央アジア、中原地域、朝鮮半島における東西の人の動きと交易活動の実態について明らかにすることができました。これらの研究成果は、本誌の「特集 古代東ユーラシアの国際関係と人流」に掲載しております。

平成30年11月17日（土）には第2回シンポジウム「東ユーラシア地域論の現在－交流・交易からみた北と南－」を開催し、新津健一郎先生に「後漢・三国政権と交州地域社会」、菊池百里子先生に「大越国陳朝期の交易と海域アジア」、蓑島栄紀先生に「9～11・12世紀における北方世界の交流」、高橋昌明先生に「平家政権の日中間交渉の実態について」というテーマでご講演いただきました。このシンポジウムを通じて、ベトナムを中心とする古代交州地域社会の形成過程と特徴、13～14世紀におけるベトナム大越国陳朝期の交易活動の実態、9～12世紀における古代アイヌによる北方地域の交易活動、12世紀の平家政権による宋との交易活動とそれともなう貿易港の整備の意義などについて検討し、3～14世紀という長期間にわたる東ユーラシア地域、とくに日本列島とその南北世界との交易活動について文献史料・考古資料をもとに明らかにすることができました。これらの研究成果は、本誌の「特集 東ユーラシア地域論の現在－交流・交易からみた北と南－」に掲載しております。

この研究プロジェクトも今年度で終了となります。5年間にわたってシンポジウム・研究会・資料調査等をおこなってきましたが、その研究対象地域は日本列島、朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、中央アジア、北方ユーラシアに広がり、対象時期も3世紀から17世紀という長期間にわたりました。これらの研究成果のなかでとくに注目されるものとしては、まず中国中原地域と中央アジア・北方ユーラシア・東南アジア・朝鮮半島・日本列島との人流・物流について歴史学・考古学から多角的にアプローチし、その相互作用を明らかにした点があげられます。これらの相互作用の結果、ヒト・モノ・情報が双方向的に移動し、東ユーラシア地域に多様な文化圏が形成されたという結論に達しました。

二つ目の成果としては、日本列島における南北の交流・交易の実態を明らかにした点があげられます。北方のアイヌを媒介とする列島やオホーツク地域との交流、東北地域と渤海との交流、南九州地域と南西諸島との交流、博多と中国との交易などについて、歴史学・考古学的に検討した結果、日本列島の南北において多様な交流・交易がおこなわれ、独自の文化をもつ南北世界を形成し、これらの地域との相互作用によって日本列島全体が変容していくプロセスを描き出すことができました。

三つ目の成果としては、日本列島における渡来人の実態を明らかにした点があげられます。弥生時代以来、日本列島に渡来し、定着した人々の実態について、現地調査も含めて検討し、文献史料や考古資料をもとに日本列島における渡来系文化の意義を明らかにすることができました。

古代東ユーラシア研究センターは、これでひとまず幕を閉じることとなりますが、今後も何らかの形で研究拠点を維持していきたいと考えております。今後ともご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、これまでご協力を賜りました諸先生方、およびシンポジウム等にご参加いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

(高久 健二)